

男性性の傷つきに敏感なジェンダー臨床論のために（その2）

コミュニケーションへと輻輳する女性性の暴力

For Gender-Sensitive Clinical Approach to Wounded Masculinity (2)

國友万裕（同志社大学）／中村 正（立命館大学）

Kunitomo Kazuhiro (Doshisha University) / Nakamura Tadashi (Ritsumeikan University)

Key words: 男性性, ジェンダー, 被虐待体験

本研究の課題と問題関心

「男性・加害者-女性・被害者」という図式を、特に暴力論の文脈では当然のことにように想定する援助者は多い。これまで男性にかかわるジェンダー臨床の援助者は脱鎧論に依るものが多く、男らしさ（鎧）を脱がせ、女性や弱者を抑圧しない男性（性）にむかうことを強調する傾向がある。女性のもつ暴力性にはスポットが当たらず、男性が女性に心的外傷を受けた経験を主訴としてもちにくく、また相談から女性性のもつ暴力性の認識としては構成されにくく、当該男性の課題へと責任帰属が転換されていく傾向がある。この過程を男性性ジェンダー臨床から導くためには女性性に固有な暴力が存在することについて被害男性の体験分析をとおして考察することとしたい。その固有性を把握するためにコミュニケーションへと輻輳する女性性と暴力という視点を提案したい。

方法

男性の被虐待体験のエピソード分析を試みる。ジェンダー社会ではドミナントストーリー化した男性性ジェンダーについては虐待と暴力における加害性に傾斜したスクリプト（台本）がある。それとは異なる被虐待体験に焦点をあてることで男性性のもつ複層性を抽出し、男性性ジェンダー体験を捕捉する幅を広げる。さらにそこで作用している女性性に特有の暴力性を抽出する。それらは従来の暴力概念とは異なるコミュニケーション的相互作用に立脚した把握となる。男性性のもつ暴力性とは異なる様式のコミュニケーションと相互作用に根ざした暴力性を抽出する。

分析

被虐待体験とは「いじめられ体験」のある男性の経験である。加害は女性たちからである。この体験のエピソード分析をもとにして女性の暴力性のファクターを八項目抽出した。

①女性と男性の成熟の速度の違いに由来するパワーの行使（学校という場においては、原則同い年の男女が一緒

に教育を受けるが、女子の成熟が速いため、アンバランスな状況が起きる）

②群れをなす感情的共同性による連帯がもたらす威圧性（一般に女性は共感能力があるため、女性同士感情で結びつきやすい。そのことが集団的な心理的暴力を生む土壌を成す）

③道徳的優位性による監視と注意（道徳的優位性とは、女性がモラルを守る性とされる役割期待に根ざす。モラルを破ったものへの過度の叱責や告げ口などが帰結される）。

④被害者・弱者の地位活用（男性が保護と庇護役割を課せられることと対になる地位役割がときに逆転する事態がある）。

⑤言語的優位性（一般に女性の方が言語能力に勝っている。そのため言葉の暴力や言葉でのいやがらせなど、言葉を武器にすることがある）

⑥同意の調達と共同性の構築（たとえば付加疑問的コミュニケーションは相手に同意を要求し、同意してくれないと排他的な傾向へと至る）。

⑦侵襲的親密さ（女性は、親密さへの垣根が低いため、男性にはプライバシーへの土足での侵入と感じられる）。

⑧男性のホモソーシャル関係への無理解（同性同士の親密な関係性には性差がある。被虐待体験のある男性は同性同士の友情へとひきこもるがこれがさらに女性からみると嫌悪増幅要因となる）。

考察

被虐待体験のある男性はドミナントな男性性への同一性形成に困難を来す。この困難は多様な関係性の困難へと至る。男性の被虐待体験分析のジェンダー臨床論への意義について考察をくわえる。

文献

ジョージ・ヴォーゲル 『女の子はいつも秘密語でしゃべっている』（草思社）